◉特別寄稿

中国・台湾との学術交流を振り返り、これからを思う

山田辰雄

愛知大学現代中国学会から随想を書くよう要請をいただいたので、この機会をかりて私のこれまでの中国・台湾との学術交流の概要を記録にとどめておきたいと思う。学術交流といっても、それは私の専門とする中国近代史の分野が主たる領域である。この交流は、人・研究課題・会議などを通して行われた。

＊＊＊

私が最初に台湾を訪れたのは一九七一年一月であり、中国を訪れたのは一九七七年夏であった。したがって、私にとって台湾の学界との関係がより古い。一九六七年夏にアナーバーのミシガン大学で Orientalist Congress が開催された。ここでコロンビア大学に留学中であった蔣永敬・李雲漢両氏と会う機会を得た。両氏はすでに第一次国共合作に関する優れた著書を出版されており、私自身もこの時期の武漢政府について研究していた。お二人は大学院学生であった私に温かく接してくださり、今日までその時の友情が続いている。

一九七一年の台湾訪問の時に私は主として台中に滞在し、草屯にある国民党の図書館に通った。その目的は一九二七年の武漢政府の文書を見ることであった。しかし、当時の国民党の政治的制限が強くこの資料を見ることが許されなかった。この種の資料はその後党の資料館が引っ越した陽明書屋、国民党中央党史委員会図書館で見ることができるようになった。

私は一九七〇～八〇年代に学術交流や会議で何回か台湾

を訪れる機会があった。この時期はまだ国民党独裁の時代であり、学術研究に対する制限も相当きつかった。時には私の孫文思想の解釈や国民党(左派)の研究で批判を受けることもあった。批判された時は心穏やかではない。しかし、私自身の考え方を変えるわけにはいかないし、やがて私の時代が来るであろうなどと居直って、批判は批判として受け入れながら研究者としての人間関係を保つことに努めた。

この時期の主要な交流の組織は中央研究院近代史研究所であった。特に林明徳・黄福慶両氏にはお世話になった。林氏は袁世凱の研究で、黄氏は清末の留日中国人留学生の研究で優れた業績をあげておられ、二人とも東京大学への留学生であった。それ故に日本語が堪能で、言葉の点からも親しく接することができた。近代史研究所の講演では私の拙い中国語に代って林明徳氏は通訳までしてくださった。お二人は二〇一三年に日台学術交流の功績によって日本政府の叙勲を受けられた。誠に喜ばしいことである。

この時期にまた、私は張朋園氏の梁啓超研究と張玉法氏の辛亥革命時期の政治史研究から多くのことを学んだ。グルメの張朋園氏は時には食事に誘ってくださったし、私のプリンストン大学留学中の一九九四年に、私のアメリカ時代の指導教授であったマイケル・ギャスター氏のニューヨークのお宅で懇談した時のことをよく覚えている。張玉法氏とは長年にわたり学術交流・会議において、そして個人的に親しく接してきている。その学識に対する尊敬の念とともに、ある時は同氏のお宅で張朋園氏を交えて麻雀の卓を囲んだことが楽しい想い出として残っている。

近代史研究所以外で最もお世話になったのは陳鵬仁氏である。同氏には日中関係(史)の研究者として中国語と日本語の膨大な著書と翻訳書がある。ある時は同氏を通して秦孝儀氏に紹介していただいた。その時いただいた『総統蔣公大事長編初稿』は今でもよく利用している。先輩としてこれまで親しく接してくださった陳鵬仁氏の友情には今でも感謝している。

＊　＊　＊

中国との交流が始まった一九七〇～八〇年代はまだ文化大革命の影響が残っている時代であり、政治的にも個人的にも相当神経を使わなくてはならなかった。そのなかで中国近代史の交流における主要な課題は孫文と辛亥革命をめぐる問題であった。困難ななかで一九八一年東京で辛亥革命七〇周年記念の日中シンポジウムが開催された。そこに私も招かれたが、私の役割は李宗一氏(中国社会科学院近代史研究所副所長)の論文に対してコメントをすることであった。同氏は辛亥革命におけるブルジョアジーの役割を相対的に高く評価されていたことが新鮮であった。一九八

山田辰雄［Yamada Tatsuo］

1938年生まれ。1969年慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻博士課程修了、法学博士。
慶應義塾大学法学部教授、放送大学教授を経て、現在は慶應義塾大学名誉教授。
〈主要著書・編著〉『中国国民党左派の研究』（慶應通信）、『近代中国人名辞典』（編著 霞山会）、『中国近代政治史』（放送大学教育振興会）、『蔣介石研究――政治・戦争・日本』（共編著 東方書店）ほか多数。

三年に短期間ではあったが私は専門調査員として北京の日本大使館に滞在することがあった。当時としては大使館つきの学者が近代史研究所を訪れることは考えられないことであったが、李宗一氏は私を研究者として研究所に招き、講演をする機会を与えてくださった。その後慶應大学で李宗一氏を訪問研究員として招き、袁世凱、楊度の話をしていただいた。残念なことに李氏は早逝されたが、二〇一二年一一月私が北京大学で蔣介石に関する講演をした時、同氏の子息である李維君が私を訪ねてきてくれた。同君は現在北京大学歴史系でドイツ史の副教授として立派に活躍している。

一九八〇年代孫文をめぐる国際会議が何回か広東と北京で開催された。孫文の出身から考えてその研究は南方で盛んであった。広東省社会科学院や中山大学の張磊・黄彦・段雲章・林家有の諸氏と孫文研究を通し親しく接することができた。そのなかでも中山大学で指導的立場にあった陳錫祺氏の綿密な孫文研究に惹きつけられ、そしてなににもまして同氏の学者としての毅然たる態度に敬意を持つにいたった。孫文に関する国際シンポジウムは中国国内でも全国的規模で行われるので、その際に中国各地の著名な研究者と知り合うことができた。すべての人の名をあげることはできないが、北京の劉太年、上海の金冲及・姜義華の諸氏の名前がすぐ想い出される。金冲及氏には多くの優れた著作があり、私の書斎の本棚には同氏の『二十世紀中国史綱』上・下がおいてあり、常時参照している。因みに、金氏の子息である金以林氏は現在近代史研究所副所長であり、将来を嘱望される中国の研究者の一人である。これらの学者の革命時代の活動の話を個人的に聞くことも大変興味のあることであった。劉太年氏は華北における闘争について、金冲及氏は国共内戦期の学生運動への参加について語ってくださった。

孫文の思想の柔軟さ、曖昧さ、そして彼の政治活動の幅

広さから考えて、孫文に関する国際シンポジウムは異なった考え方を持つ研究者が参加するのに最も適したものであった。それらに参加するなかで、私は孫文の思想を「連ソ・連共・労農扶助」の三大政策によって理解することは不十分であると主張した。また、日本の資料を用いて一九二二～二三年の廖仲愷の訪日に関する論文を発表した。その時陳錫祺氏にお褒めの言葉をいただいたが、それは若い私にとって大いに励みとなった。

北京の近代史研究所との交流は、一九八〇年代に始まる『中華民国史』とそれに付随した『人物誌』の刊行を通して始まった。文革時代の革命史観が残る当時において中華民国史の体系的研究成果が出版されること自体新鮮であったし、その人物誌のなかにはそれまでとは違った新しい評価も登場していた。この計画には多くの研究者が参加していたが、楊天石氏と王学荘氏は若き指導者として注目されていた。この二人との関係は今日まで続いているが、特に楊天石氏とはその後共通の研究課題に取り組んできた。二〇〇〇年から楊天石氏、エズラ・ヴォーゲル氏（ハーバード大学）と私が中国、アメリカ、日本の代表者となり、日中戦争の国際共同研究に従事してきた。この計画は日米中台その他諸国の多くの研究者を動員し、五回にわたる国際会議を開催し、それぞれの言葉で論文集を刊行した。それはまだ続いており、第六回の会議は二〇一五年に台北で開催される予定である。楊天石氏の近年の蔣介石研究には圧倒される。同氏は膨大な量の蔣介石日記の原文を書写し、それに基づいて非常に多くの論著を発表された。私が論文を書くにあたり、楊氏の好意で蔣介石日記の一部を拝借したこともある。

＊　＊　＊

北京における学術交流で想い出深いのは北京大学との関係である。一九八六年と記憶しているが、北京近郊で孫文に関する国際会議が開かれたのち、北京大学教授の張寄謙氏に招かれ同大学で話をする機会を与えられた。その時将来の日中交流について話し合い、私の方から将来有望な若い研究者を日本に招いて一緒に研究をしたいので、張氏に誰かを推薦してほしいとお願いした。その時推薦されたのが若き日の王暁秋氏であった。その後同じような理由で北京大学にお願いしたら、その時は茅海建氏が推薦された。二人とも慶應義塾大学でお迎えし、研究をしていただいた。王氏は北京大学教授で、日中文化交流史の研究者として、茅氏は華東師範大学教授で、清末民初の政治・思想史の研究者として中国で指導的地位に立っている。

北方における学術交流のもう一つの拠点は南開大学であった。日本外交史を含む日中関係史の専門家である兪辛焞氏は日本人以上に日本語に通じ、その真摯な研究姿勢に

心を打たれ、励まされた。同氏には自らの不勉強を恥じずに日本の資料について教えていただいた。兪氏は自分の研究だけでなく、日本の友人の支援も得て南開大学における日本研究センターの建設に尽力された。日本研究センターは現在日本研究院に発展し、兪氏のもとで育った楊棟梁氏がその責を担い、現在では宋志勇氏が院長を務めている。一九九〇年代には私のかつての学生であった小熊旭氏が国際交流基金北京事務所の所長をしており、南開大学の日本研究を大いに支援してくれた。研究成果から見ると、南開大学の日本研究は中国における最高水準に達したといえる。

南開大学との関係でいま一つ記録しておくべきことは、橘樸の研究でお世話になったことである。橘が一九二〇年代に天津で『京津日日新聞』の主筆として活躍していたことはわかっていたが、その新聞の所在がわからなかった。この時もまた、兪辛焞氏が、そして宋志勇氏がこの新聞の一九二二～二三年の部分が天津市図書館にあることを突きとめてくださった。しかし、それは公開されない資料であった。それにもかかわらず、両氏はわれわれが真摯な日本の研究者であることを説明し、その結果閲覧が可能になった。しかし、作業はそれほど簡単ではなかった。それは、二年間の新聞のなかから橘樸が執筆した三六〇余篇の記事を抜き出し、古びた新聞から判読困難な活字を復元し、ワープロに入れる作業であった。この仕事は数年を要し、家近亮子君を初めとするかつての私の学生たちと学界の友人に参加してもらった。天津を訪れるたびに南開大学の先生方にお世話になった。この努力は『橘樸　翻刻と研究――「京津日日新聞」』（山田辰雄・家近亮子・浜口裕子編、慶應義塾大学出版会、二〇〇五年）のなかに結実した。

南開大学に関し最後に言及しなければならないのは、魏宏運氏からいただいた激励と啓発である。同氏は若い時代に革命運動を経験されており、研究面でも抗日戦争期の中国社会に対する多くの実証的研究を発表され、さらに中国近代史に対する全体的展望をも保持されている。天津を訪問した折、同氏は親切に度々自宅に招いてくださった。魏宏運氏夫人は山東省出身であり、お宅で作っていただいた山東の家庭料理である「合菜戴帽」の味は忘れられない。

＊　＊　＊

北方からいま一度南方に目を転じてみよう。南京は中国における中華民国史研究の重要な中心の一つである。私はかつて南京大学の張憲文氏が『中華民国史綱』（河南人民出版社、一九八五年）を出版された時に大いに注目した。この段階で張氏は抗日戦争における国民党の役割を相対的に高く評価された。それは今日の民国史の発展にとって突破口であった。同氏はその後度々中華民国史の大規模な国

際会議を主催されており、近年では南京事件の研究、新しい中華民国史の刊行で指導的役割を果たしておられる。

一九八八年三月に私は約一カ月間招かれて南京大学で講義をする機会が与えられた。民国史に関する私の拙い中国語の講義を教員と学生諸子が聞いてくれた。そのなかには張憲文氏のもとで研究に励んでいた若き日の陳謙平氏や陳紅民氏がいた。彼らは現在中国の民国史研究の分野で指導的立場に立っている。この間南京の第二檔案館を何回か訪ねた。当時の檔案館は現在と違い大変開放的で、書庫に入ることができ、北京政府時代の裁判記録、汪精衛政権の資料、蔣介石の日記の抄録などを直接手にとって見、その一部はコピーをとることもできた。この時中国では上海を中心にして肝炎が流行していた。そのことを心配した張憲文氏には毎朝私の宿舎に漢方薬を煎じた予防の飲み物を届けていただいた。

＊　＊　＊

以上において中国の各地域との交流を中心に述べてきたが、全国的近代史研究の交流を促進する意味では一九九〇年代に始められた村山内閣による中国・台湾・韓国との歴史研究に対する支援が大きな役割を果たした。中国との歴史研究をめぐる交流は日中友好会館に託された。中国側は劉太年氏を座長とし、日本側は隅谷三喜男氏を座長とする歴史研究評議委員会が組織され、私も日本側委員会に参加した。この研究資金はいろいろな目的のために使われたが、その最大の成果は日中双方が多くの研究計画を助成し、学術的著作を出版したことである。刊行された書物は二〇〇冊余に及ぶ。尾形洋一氏は研究員として委員会の運営にあたるとともに、中国近代史に関する膨大な資料の収集に努められた。その主要な内容は日中戦争と中国の統計に関するものである。現在それらは京都の国際日本文化研究センターに保管され、公開されている。

このような学術研究の推進は、当然のことながら人の往来をも促進した。多くの両国の研究者が相互に訪問した。この時期とその後に来訪した中国の研究者のなかには近代史研究所の歴代の所長も含まれていた。そこには張海鵬・歩平・王建朗諸氏の名前がある。この三氏には慶應大学に来ていただき、研究者としての生活を共にした。歩平氏は日本語が堪能である。日中間に問題が起こると私は同氏と長時間にわたり意見を交換する。歴史問題との関連で日中両国民の感情の違いを遠慮なくぶつけあう。これは、歴史の資料を読むよりも私の中国理解に大いに役立っている。二〇一二年一一月に三週間ほど王建朗所長に招かれて私は中国を訪れた。これは、日中関係が悪化し、中国共産党が十八全大会を開催していた時であった。この間私は汪朝光氏の主催で近代史研究所で蔣介石に関する講演を行った

が、それ以外は図書館に行くこともなく、すべての時間を中国の専門家と日中関係について話し合うことに費やした。これも悪化した今日の日中関係を理解するうえで大変有益であった。互いの相違を認めつつ本音で議論をし、なおかつ関係を維持することができることは、私の中国との交流の大きな資産である。

＊　＊　＊

日中学術交流のなかで留学生の重要性を指摘しておきたいと思う。私は慶應義塾大学時代に多くの中国人留学生を受け入れた。そのなかでも四人の学生の名前を記しておきたいと思う。蔡建国・唐亮・段瑞聡・周偉嘉の諸君がそれである。彼らは立派な博士論文を完成し、現在学界の第一線で活躍している。蔡君は上海の同済大学で、唐・段・周君はそれぞれ日本の早稲田大学・慶應義塾大学・産業能率大学で教鞭をとっている。私は彼らが中国に戻り学生の教育にあたるのもよいし、日本で教育と研究に貢献してくれるのもどちらもよいと思っている。蔡建国君のように日本を最もよく知る人間が中国で教育と研究にあたることは日本の立場からすると大変望ましい。それと同時に他の三君は日本の学生を教育し、彼らの中国理解を助けてくれている。私は日中両国間に問題が起こると先ず彼らに電話をする。彼らは両国民の感情を理解してすぐに反応してくれる。中国の留学生は私の日中文化交流にとって欠くことのできない担い手である。

＊　＊　＊

以上の中国との交流から再度台湾との学術交流の問題にもどる。一九九〇年代以降民主化した台湾との学術交流は大きく変化した。イデオロギー的拘束から解放され、日台間の研究者の往来も飛躍的に増大した。村山内閣の台湾との歴史研究に対する支援の任務は交流協会に託された。交流協会の方針は若干の資料購入に予算を割いたが、その多くの部分が研究者の交流のために使われた。これまで日台の学術交流にそれほど関与していなかった多くの研究者が相互に訪問した。私自身もこの基金の受益者であったが、この基金によって多くの台湾の中国研究者を日本に招くことができた。そのなかには、中央研究院近代史研究所の歴代の所長である陳三井、呂芳上、陳永発、黄克武の諸氏の名前も見られる。呂芳上氏は国民党史・中華民国史の研究者である。特に私は同じ問題意識を持っていたので、同氏の一九二〇年代の国民革命時期の研究に大いに啓発された。彼らは当初必ずしも日本の学界に通じていなかったが、来日後日本の中国研究者に接し、その真面目な態度と友好的雰囲気を体得してくれたことと思う。以後、共同研究、資料収集、個人的往来のあらゆる面において日台間の

中国近代史をめぐる学術交流は拡大していった。

近代代史研究所において林明徳氏と黄福慶氏が日本留学生として日本との学術交流を担ってきたのであるが、現在はその第二世代として黄自進氏と張啓雄氏がいる。張氏は東京大学で博士学位を取得し、黄氏は慶應義塾大学で博士学位を受けた。黄氏は慶應義塾で学んだ関係上私との関係が深い。同氏は日本の近代政治・思想史から出発し、今日では日中関係史、蔣介石研究の分野で国際的に活動している。台湾を訪問する私の友人たちは黄自進氏に個人的にもお世話になっているようである。台湾の日本留学生のなかで黄英哲氏の役割にも注目しておかなければならない。同氏はかつて慶應義塾時代の私の学生であったが、立命館大学で博士学位を取得し、現在愛知大学で教鞭をとっている。同氏は近代台湾における文化的変容、そしてそれが単に台湾の問題だけでなく東アジアにおける普遍的意味を持っていることを教えてくれた。黄英哲氏もまた、日中台の学術交流に熱心で、日台の学術交流のために大学のみならず個人的レベルでも大いに貢献してくれている。それ以外に、私は交流協会を通して現在台湾の日本研究支援の仕事にも携わっている。

＊　＊　＊

以上において、私は人・研究課題・会議などを通して中国近代史を主体とする中国と台湾との学術交流の極めて個人的経験を述べてきた。ここで言及している大部分の研究者は中国や台湾の学界において長老級の人である。私自身が七七歳になったのであるから仕方ない。しかし、現在でも若い研究者たちとも接触を保っている。私の手元には、これまでの交流を通して中国と台湾の研究者と交わした膨大な数の名刺がある。それらを見るとき、各々の方との想い出がわき上がってくる。しかし、限られた紙数のなかで全ての人に言及することは不可能である。それらの人々に思いを寄せつつ、ここでは十分に言及できなかったことをお許しいただきたい。

＊　＊　＊

最後に、これらの交流を通して私が得た経験と心得を日本の中国研究者として述べておきたいと思う。幸いなことに私は学術交流の面で、中国と台湾の研究者との間で比較的良好な関係を保っている。冷戦と国共対立の時代にあってそれは簡単なことではなかった。私が目指したのは、このような状況にあっても自らはできるだけ政治的にならないことであった。しかし、政治的にならないためには相手の政治状況を最もよく把握しておく必要があった。私は時には中国や台湾の政治や学界の在り方について批判的になることもあった。その場合心得たことは、批判はするが、

中国へ行って台湾の悪口を言わないこと、台湾へ行って中国の悪口を言わないことであった。その根底には中国人と中国文化に対する私の尊敬の念がある。

以上の視点を研究上で表現するとすれば、双方の歴史観の相違を前提としつつ、相互に理解と対話が可能な学問的枠組みと課題を設定することである。それによって相違が政治的、感情的対立に至らないよう努めてきた。ここでは説明を省略するが、私が提唱した国民党左派の研究、日中関係の一五〇年、中国政治の連続性と「代行主義」はこのような意図に基づくものであった。

日本の中国研究者は常に中国と台湾でどのような研究が進んでいるのか、その視角はどういうものであるかを意識している。したがって、良きにつけ悪しきにつけ、われわれは中国と台湾の研究の影響を受けてきた。日本の中国研究者は少なくとも外国語として中国語と英語を学ぶ。確かに中国人研究者は中国の社会と歴史に通じ、豊富な資料を持ち、言葉の面でも日本人研究者はかなわない。当然われわれは中国の研究を尊重しなければならない。しかし日本は中国語圏以外の地域では最も多くの中国研究者を有する国の一つである。過去の長い日中関係の歴史を顧みると、日本には中国近代史に関するかなりの資料と研究の遺産がある。そこには日本の研究者独自の視角がある。

今日中国や台湾の研究者のなかには日本語に通じている人もいるが、まだ十分ではない。われわれも外国語で研究成果を発信する努力をしなければならないが、中国人研究者にも日本語の習得において一層の努力をしてもらいたいと思う。これまで中国と台湾の研究者との交流は盛んであったが、多くの中国人研究者の訪日の成果は主として資料の面に現れており、必ずしも日本の研究の視角が批判的に検討されていない。かつて日本人の日本研究者がその言語や資料の優位から日本内部の研究に満足していた時代があった。しかし、その後比較政治、近代化論などに基づいた日本研究が欧米から入ってくるとその影響を受けざるを得なかった。今日欧米の日本研究の成果を抜きにしては日本の日本研究は成り立たない。一部の中国の研究者のなかには日本における中華民国史研究が中国の改革開放につれて発展してきたと考えている人がいる。この観点は、一九六〇年代以降日本やアメリカで発展してきたこの分野の研究に対する認識が欠けている。私が言いたいことは、中国近代史の研究は中国と台湾の研究者が優位に立っていることは認めつつ、往々にして外の世界の自由な雰囲気が彼らの気づかなかった新しい問題を提起するということである。